



よみがえる グリーンライン

～ちょっと寄り道「ゴン太郎」のはなし～



グリーンラインを愛する会
理事長 丸山 孝志

「捨てられ犬保護活動」の中で出会った一匹が「ゴン太」のちの「ゴン太郎」です。彼との出会いが無かったら私たちの人生もずいぶん違っていたと思います。もちろん保護活動に対する考え方も彼のお陰で大きく変わりました。今回から少し寄り道をしてその話をしたいと思います。

最初の出会いは2008年の夏でした。家内から私に電話がありました。「グリーンラインでまた犬を見かけたよ。今度はでっかいよ。一人だと怖いからいったん帰るね。」

帰ってきた家内と一緒に現場に行ってみると、彼はまだそこに居ました。体長50センチ以上はありそうな赤鼻が特徴の雑種でした。「さて、どうやって捕まえようか?」と考えながら車を止めドアを開けました。

ところが驚いたことに彼は嬉しそうに寄って来て、開けたドアからサッサと車に乗ってきたのです。

これには驚きました。色々策を講じる必要が無かったのですぐに獣医に連れて行き、その後一応我が家に連れて帰り、愛護センターと警察に連絡をしました。結局何処からも問い合わせも連絡もなく、我が家で保護をして里親探しをすることにしましたが、こいつの乱暴狼藉との想像を絶する格闘がそこから始まったのです。

誰かに飼われていたのは確かですが、全くしつけもされてなく、「待て」も「お座り」も全く無視、こっちの顔を見ると全力で体当たりしてきます。

テラスのあちこちで用を足し、植木は倒すし、ゴミ箱はかじる、スリッパも破壊する…。

散歩に出ると全力疾走、それも用足しから突然全力ダッシュなので何度もひっくり返され、腕は痛めるので数日で私は疲れ切ってしまいました。仕事すら手につきません。

オマケに夜中に遠吠えをします。静かな住宅街に響き渡る遠吠えは「パトカーを呼ばれるかも」と言う状態で、やむなく夜はこのでっかい犬を室内に入れるしかありませんでした。今度は私の部屋がトイレ

と化しました。

何度も脱走もしました。追いかけると喜んで走り回ります。かといってほっておくといつまでも帰ってこないし、ご近所の庭や畑を荒らしまわると、1時間もそれ以上も追いかけてまわし、こっちが疲れ果てた頃に「さて、帰るか。」と寄ってくるのです。

「保護活動」という言葉がこれほど重いものだという事を彼が教えてくれました。たった一匹の保護犬ですら、保護し、一時預かりをしながら躰をし、里親様に渡せるまでの訓練をして、それから里親探しが始まるのです。一匹の犬に必要な時間と費用と忍耐心、とても同情心などでは担いきれません。

多頭飼育崩壊や保護活動をする人たちがぶつかる壁が私の目の前に立ちふさがっていました。

正直に言います。「もう一度山に帰すか?」と言う思いが脳裏をよぎりました。でも「始めたことを途中で投げ出すのか?」と言う誰かの声がそれをさせませんでした。

私たちの惨状を見かねて一時預かりを申し出て下さった方は夜半に吠えまくる彼の様子を見に行き、彼の掘った落とし穴に落とされてしまいました。

こんな状態が1か月以上も続きました。



保護した当時のゴン太郎(ゴン太)